専修大学社会科学研究所に思う

内田　　弘

[1] 社会科学研究所との出会い・事務局員

本学入職(1975 年 4 月)間もなく行われた新任者歓迎会の席で、「専修大学には社会科学研究所という研究所があります。内田(弘)さん、所員になりますね」と勧める方がいる。「面接試験はあるのでしょうか？」と尋ねると、破顔一笑、「いや、面接試験などありませんよ。新任者はどなたにも所員になってもらうことになっています」と答えた。これがわたしの専修大学社会科学研究所との最初の出会いである。

まもなく事務局員を依頼された。最初は研究会担当であった。チーフは加藤佑治さんである。そのころ研究会は不定期的に行われていた。「社会科学研究所は研究所なのですから、月例にしませんか」と加藤さんに提案すると、「そのとおり。内田(弘)さんにも報告者を提案してもらえるでしょうね」と加藤さんは応えた。わたしは初対面の所員の方にもお願いした。しだいに月例にちかくなった。つぎの担当は財政であった。酒井進さんと一緒であった。酒井さんには大変お世話になった。これも数年担当した。

しばらくして、助教授(当時の名称)になって数年後、年長者の三輪芳朗さんに推され総会で選任され事務局長になった。在任期間は 1981 年 4 月から 1985 年 3 月の 2 期 4 年間である。三輪さんが所長である。

[2] 社研プロジェクト・物流・内田義彦「大佛次郎賞」・事務局運営

『専修大学社会科学研究所四〇史』(1993 年)にはそのころことが詳しく記録されている。「社会科学研究所プロジェクト」を発足したのは所長が三輪さんで事務局長がわたしのときである。三輪さんは手術を受けて片肺であったが、その三輪さんが「社会科学研究所の運営は《片肺飛行》ではないか」と嘆かれた。学内の《冷戦体制的コンフリクト》を暗に「片肺」と表現したのである。三輪さんのこの観点にわたしも同意した。三輪さんは「両肺飛行」の「社研プロジェクト」の必要を力説し総会で承認を受け発足させた。詳細は『四〇年史』にゆだねる。「社研プロジェクト」担当の事務局長は池本正純さんにお願いした。社研プロジェクトには当時の所員約八〇名のうち数十人が参加したと思う。沢山の所員と会って参加をお願いした。池本さんは人なつっこい人柄でうまくまとめた。

いまでも記憶に残るのは、池本さんが「物流」の重要性を説き、実際に見学・調査をおこなったことである。まだ POS システムが一般的に認知されていなかった。現代日本資本主義では部

分的経済計画が多様で重層的なPOSシステムで実現している。販売・物流・生産のネットワークが企業間・産業間を連結して動いている。池本さんのオピニオン・リーダーシップで、物流の重要性を所員の多くは初めて認知したのではなかろうか。

内田義彦さんが『作品としての社会科学』で大佛次郎賞を受賞したとき(1981年)、それを記念し社研はシンポジウムをおこなった。わたしが司会を担当した。このシンポで若手の所員数人が内田さんに質問をした。質問者の1人、常行敏夫さんがその経験を『四〇年史』に「美しい思い出」として記録している。わたしもその奇跡的瞬間を懐かしむ。もっとも内田(義彦)さんは、質問に参加した内田(弘)は若手ではないと見ていたと思う。そのシンポの時期は、経済学部のカリキュラム改定の作業が始まる少し前の頃である。

事務局長は2期4年間、務めた。わたしの事務局長の留任は三輪さんの強い要請である。「2期4年」は社研創設以来の長期新記録といわれた。三輪さんは所長を5期10年間、務めた。超長期である。三輪さんとは学期中の火曜日には事務局の用件で、土曜日には研究会で会った。三輪さんは研究会を1回だけ欠席した他は、すべて参加した。その間、柴田弘捷さんは事務局員として力強く支援してくれた。事務局長を退任する所員総会で、「この4年間、わたしはすべての会議、すべての研究会に出ました」と報告すると、なにもそこまでしなくても、という困惑の反応があった。逆にもしサボったら、もっと厳しい反応があったかもしれない。三輪さんと同伴し《適当に》はないのである。

事務局長就任早々、グループ研究助成の応募に《2人でもグループである》といって、10人前後が普通の他のグループと同額の助成金を要求する方がいた。事務局会議で批判の声が上がった。そこで一旦その申請を引き取ってもらい、研究助成制度を人数で二つの範疇に区別し総会承認を得た。その公的な決定の後でも、ときたま旋風(つむじかぜ)が吹いた。《組織運営上の不合理是正には憎まれ役が必要悪である》という命題は、研究所とは限らないが、もう過去の事になっていると楽観する。この変更を現行の助成規定は基本的に継承している。

[3] 現存社会主義シニシズム・チェルノブイリ

事務局長退任のあと数年経って、専修大学長期留学制度で欧州を巡った。社会科学研究所もふくめて、来し方を遠方から回顧できた。

1986年秋の東ベルリンは「模範都市」といわれた。しかし実態は欧米日の模倣と援助で支えられていた。指定され泊まったホテルはアメリカが建設したものであった。日本が建設したホテルもあった。職員の組織の歯車のような対応に現存社会主義国の致命的な欠陥を痛感した。高い自尊心と粗末な品質が対照的である。東ベルリンの郵便局では英国に送るため段ボールに書籍を入れ中身を確認しやすくロープで結んで受付にもっていくと、「指定百貨店で指定厚紙を

買いそれで梱包し直しなさい、でないと受付けません」と指示された。ライプチヒのホテルでは注文しない高額な料理を出され、言い争いはせず食べた。

外貨獲得に不合理なシステムが張り巡らされていた。東ベルリンから西ベルリンに出て戻るビザを取るために役所にいくと、窓口の係員が「手持ちの外貨(アメリカドル・西ドイツマルク)をあそこの(近くの)両替所で東ドイツ・マルクに両替し、その東ドイツ・マルクをここで収めなさい」という。わたしが「ホテルですでに両替した東ドイツ・マルクをもっていますから、それで収めます」といっても、「いや、あそこで両替したものでないと、受け付けません」と一点張りであった。わたしの後に列をなす人々が「従う他ないのよ」と妥協を促す。不合理な要求に応じ、西ベルリンに向かった。

西ベルリンに出る通路は、頻繁に左右に方向転換させる高い板張りの路である。視線を感じ見上げると、頭上の高い鉄塔から機関銃を構える兵士が、西ベルリンへの入口「チャーリー・チェックポイント」に向かうわたしたちを監視している。１週間ホテルから通ったマルクス・レーニン主義研究所の巨大な鋼鉄張りの玄関の両脇に、機関銃で武装する兵士が２名立っている。ゲムコウ所長を始め意見交換の相手になってくれた研究員はみな良い方であったが、「社会主義のシニシズム」の記憶は消えることはない。東独訪問の３年後(1989 年)、「ベルリンの壁」は抵抗なく自壊した。不合理な組織への《ウマクヤルサの合理的適応》がその組織を壊したのである。

欧州への出発は 1986 年７月下旬であった。日ソ経済学者交流協会に三輪さんが入っていて、「君の欧州留学の直前の時期だから一緒にソ連巡りをしないか」と誘われていた。出発の数ヶ月前、ウクライナのチェルノブイリで原発が爆発事故を起こした。「三輪さん、危ないですよ、わたしはソ連視察には参加しません」と断ると、三輪さんは残念そうであった。まもなく、「君のいうとおり危ないから中止になった」と三輪さんから連絡があった。帰国後、欧州留学の報告「『資本論』形成史研究の旅」を定例研究会で行い、その要旨を『社研年報』に寄稿した。

[4] 事務局長以後

事務局長を退任したあとは、『年報』や『月報』などに拙稿を投稿させてもらった。研究会・実態調査などにも参加した。中国・ヴェトナムへ・韓国の視察も懐かしい思い出である。改革開放の中国は、日中国交回復運動で訪れた文革中国(1971 年)とは、がらりと変わっていた。文革京劇が伝統京劇に戻っていた。ヴェトナムは「ドイモイ」の最中であった。改革開放の中国の後を追うヴェトナムも中国と同様に「まずは土地所有から地租を確保し経済近代化の基金とする《レントナー国家資本主義》であろう」と『月報』視察特集号に書いたら、教授会でいつもわたしの前の席に座る望月清司さんが「君のいう《レントナー国家資本主義》に似たことを

飯沼二郎さんが書いているよ」と教えてくれた。『地主王政の構造』(未来社、1962 年)のことである。もっとも、飯沼氏はその著書で展開した現存ソ連中国に関する見解を『風土と歴史』(岩波新書、1970 年)で撤回していた。飯沼氏と河野健二氏の二冊の共編著の世界資本主義論(岩波書店)も読んだ。その研究の一端をわたしが編集した経済学史学会英文論集シリーズの一冊、*Marx for the 21st Century* に寄稿した。

社研との関係で最初に親しくなったのは、加藤佑治さんである。最近、《専修大学社会科学研究所刊行・社会科学研究叢書 15》の『東アジアにおける市民社会の形成』に「総論の 1」を寄稿した。そこで、現代資本主義の支配的システムは《雇用者と被雇用者の二者関係》でなく《レントナー(配当金利子地代などのレント取得者)・現場指揮者・被雇用者という三者関係》であると指摘した。『資本論』の基本枠がこの《三者関係》である。《二者関係》だけでみていると、資本主義の巧妙な仕組みが分からない。その典型例が派遣労働である。派遣労働法がふたたび問題になっているころ、加藤さんは猛烈に批判した。叢書の拙稿を読み直して、加藤さんの監修『フレキシビリティー ー今日の派遣労働者ー』(新日本出版社、1991 年)に言及しなかった不注意に気づいた。こう記すのはその補注である。

三輪芳朗さんは「予見の人」であった。中国が改革開放を始めたころ、松下電器が建設した中国電器工場を視察し帰国して、「もうすぐ中国は日本に追い着き追い越すよ」と語った。韓国視察のときは、浦項製鉄所・現代自動車・サムスンの工場を視察した。ちょうど韓国で百貨店の自壊事故があったころである。その影響で韓国の経済動向を厳しく評価する同行者もいた。サムスンは現場を見せてくれず、会議室での質疑応答のみであった。わたしは、社外秘に値するものをもっていると自認するサムスンに侮れないものを直観した。その後のサムスンの展開はわたしの直観を確証した。

定年退職 2 年前に所長になった(在任期間 1 期 2008 年 4 月～2009 年 3 月)。その 2 年度目に海外視察で韓国を訪問した。そのとき見た韓国の大きな変貌は予想を超えていた。飛行場からソウルにチャーターバスで近づくにつれて姿をみせるソウルの威風堂々の姿に驚くと同時に、やはり、の思いが浮かんだ。あの上海ほどではないが、ソウルにも静かに唸るエネルギーが渦巻いている。最初の韓国視察では忘却できない経験がある。慶州の天馬塚の近くで韓国の初老の人が我々視察団に突然、大声の日本語で《日本人、皆、嘘つきね》と批難の声を上げた。日帝朝鮮支配 35 年は消せない。日本市民社会論の欠落点でもある。この痛切な記憶が韓国視察を日韓関係史の観点から行いたいとの所長提案になった。幸い受諾され、ソウル・光州・釜山などを視察した。光州では光州事件の犠牲者が埋葬されている墓地で献花を行った。

前後するが所長 1 年度目には、タイのバンコックとチェンマイを視察した。所員の原田博夫さんが所属した慶応大学加藤(寛)ゼミの同級生が当時、タイ中央銀行総裁の要職にあった。そ

の機縁で国際金融危機のテーマで共同シンポジウムを行った。流麗な英語を話す若い司会者が印象的であった。チェンマイのホテルの広く天井が高いホールに流れるピアノ演奏は気高いロマンを醸し出し旅情を深めた。タイは佛教王制国であるという強い印象を受けた。バンコックの宝石で絢爛たる本寺院に王室がぴたりと隣接し、その両者を近衛兵が守る。さらにその外側からタイ国陸軍が護衛している。その中心点からタイ全国にのびる主要道路は、タイ国王が通った足跡を記念する黄色い旗がたなびく「御幸通り」である。学校・工場など至る所に祠がある。タイは(神権ならぬ)佛権レントナー国家資本主義ではなかろうか。

わたしが所長であった当時、事務局長であった村上俊介さんはタイ視察直後、写真ファイルを作成しわたしに送ってくれた。最近それをなつかしく見なおしていたところ、編集担当の福島義和さんからこの寄稿依頼があった。何かの機縁である。

《専修大学社会科学研究所とわたし》の観点から、わたしの知る社研史の一端を回顧し、本研究所の存在意義を再確認した。専修大学社会科学研究所に深く感謝する。　　(以上)



第１号からの月報（社研の書庫）